

第35回 明治大学人文科学研究所公開文化講座のご案内

— 総合テーマ —

## 『 孤 立 と 社 会 』

明治大学人文科学研究所学内講演会実行委員長

明治大学文学部教授

櫻 井 泰

去る3月11日、東日本は未曾有の大地震と津波に襲われ、その後福島で原発事故が発生した。この破局的状況のなか、人々の平穏な日常は一瞬にして失われ、かけがえの無い多くのものを失った罹災者たちは、些かの猶予もなく住み慣れた土地からの避難を強いられる。それが強制的なものであれ、自主的なものであれ、遠隔の地への移住は生活の安全と引き換えに、同時に地域社会との訣別を迫る結果となる。そしてその決断には、見知らぬ土地での経済的自立の困難と社会的・精神的孤立という不安が胚胎する。そのため、危険や不便を承知のうえで、慣れ親しんだ土地にそのまま留まり続ける人々も多い。辛い境遇を共有し、地域社会の枠組みの中に留まることの方が、ひたすら安全を求めて見知らぬ遠隔地へと移住するよりも、人々に災害や不幸に耐えて新たな一步を踏み出す原動力ともなり得るからである。

罹災者の抱く孤立感は、ひとりそうした状況に置かれた人々だけに特有なものではなく、地域社会の結びつきが希薄となった都市部の住人たちにも共通する。また人間関係が希薄となった現代社会においては、ふとした何気ない些細なことが発端となって、疎外や孤立を生じかねない。一度こうした状況に陥れば、高齢者等を始めとした社会弱者にとっては重大な結果を招来させかねない危険がある。そこで今回、公開講座の総合テーマに「孤立と社会」を設定し、これを文学、放送メディア、経済および地域医療という人間社会の幅広い座標軸から考えてみたい。

主 催 明治大学人文科学研究所

日 時 2011年11月12日（土曜日）午後1時～6時

会 場 明治大学駿河台キャンパスアカデミーコモン2階 A1～A3会議室

(JR御茶ノ水駅下車徒歩3分)

聴 講 無 料 (事前申し込み不要。直接会場へお越しください。)

## 講演1 「ドイツ文学の世界」から —トーマス・マンの初期短編群を巡って—

明治大学文学部教授 櫻井 泰

洋の東西を問わず、近代以降の文学には「個人」と「社会」の関係に焦点を当てた作品が多い。この背景に近代以降の自我の覚醒があることは付言するまでもない。そして覚醒した自我は、多くの場合、旧弊たる社会の慣習、体制や思想と激しく衝突する。かつてゲーテは感情の革命家ヴェルターを描いたが、ゲーテを芸術上の師表と仰ぐトーマス・マンはデカダンスの時代に、情熱的行動人ヴェルターにかえて、そもそも他人と接すること自体に言い知れぬ緊張感を覚え、自己を主張することに戸惑いと惧れを感じる若者たちを描きだす。その代表格の若者トーニオは、万事に折り合いが悪く教師たちとは喧嘩をし、他の連中からは仲間はずれとなってしまう。そして「いったい自分はどうしてこんなにも風変わりなのだろうか」と悩み、苦しむ。これはまさに裕福な穀物商會を営む家庭に生まれ、商人になることを宿命づけられた自分の未来に閉塞感を覚え、「孤立感」に苦しんでいたマンその人の姿に他ならない。ここではそうしたトーニオを中心に、トーマス・マンの初期短編群における主人公たちの「孤立感」の意味を考えてみたい。

略 歴： 1948年生まれ。東京大学大学院修了。神戸大学助手教養部、同専任講師をへて、1980年以來、明治大学文学部勤務。現在は明治大学文学部教授。専門は現代ドイツ文学、とくにトーマス・マンにおける「ゲーテのまねび」*imitatio Goethes* および、マンの「大好きな神」ヘルメースとマン文学との関わりを中心に研究している。

## 講演2 放送メディアと個人

放送倫理・番組向上機構放送人権委員会 調査役 長谷川 澄 男

インターネットが普及した今日においても、放送、特にテレビは個人にとって最も身近なメディアであろう。情報の入手、娯楽の享受等、日々の生活に欠かせないものになっている。しかしその一方で放送が個人に牙を剥く事態も起きている。番組によって人権を侵害されたとの申し出が絶えず、あるいはそこまでいなくても見るに耐えないとか、子供に悪影響を及ぼす番組が氾濫しているといったテレビへの批判はこれまでになく高まっている。こうした声をバックに放送を規制しようとする

政・官の動きも根強くある。個人を押し潰しかねない強大な影響力をもつ放送のいわば陰の部分について、最近どんな事例が起きたのか、その背景には何があるのか、それを防ぐにはどうしたらいいかについて、放送と個人の関わりの観点から、取材部門を中心に放送業界に40年、放送を出す側にもそれをウオッチする側にも身を置いた経験をもとに具体的に考えてみたい。

**略 歴：** 1971年東京大学卒業，同年NHK入局，ワシントン特派員，バンコク特派員などを務める。1991年フジテレビ入社，報道局外信部長，解説委員などを経て，2010年から放送倫理・番組向上機構放送人権委員会調査役。

### 講演3 孤立と社会 —アジア経済の視点から—

アジア開発銀行研究所長 河合正弘

個人が社会から孤立して生きられないように、国家も国際社会から孤立して生き延びていけない。個人が生きるためには、労働サービスを他人に提供し対価を得て、他人からモノを買って消費することが必要だ。無論、自給自足の生活は可能だが、それでは生産性が低くなり、高い生活水準は望めない。経済的に豊かになるには、各個人が社会の中で仕事をし、分業に携わる必要がある。

国家の場合も、国際社会の中で分業に参加しないと、経済的に豊かになれない。北朝鮮やミャンマーは、閉鎖的な孤立政策をとって国際分業に十分参加しておらず、その生活水準は低い。中国も1970年代末までは閉鎖的な経済体制をとっていたが、1980年代に入り改革・開放政策を進めて、国際経済社会に参加した。その結果、生産性が著しく向上し、めざましい経済成長を遂げ、日本を上回る世界第二の経済大国になった。

日本が東日本大震災から復興して着実な経済成長を果たすためには、ダイナミックな成長を続けているアジア諸国や、先進国として重要な欧米諸国との経済連携の強化がますます必要になっている。たとえば、韓国・中国との間でEPA（経済連携協定）を結んで、それをASEANとの間の既存のEPAとつなげて、アジア広域的な貿易圏をつくることや、欧州連合とのEPAあるいは米国を含む諸国とのTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の締結を進めることが重要だ。少子高齢化を迎えている日本にとっては、海外諸国との間で国際分業を深めて生産性を向上させることによってしか、明るい未来を切り拓くことはできない。

略 歴： 1947年生まれ。1973年東京大学修士課程修了（経済学）、1978年スタンフォード大学経済学博士号取得。ジョンズ・ホプキンス大学准教授、東京大学教授などを経て、世界銀行東アジア大洋州地域担当チーフエコノミスト、財務省副財務官、同省財務総合政策研究所長などを歴任。専門は、国際経済学・金融など。2007年からアジア開発銀行研究所長。東京大学名誉教授。

## 講演4 孤立と社会 ―地域医療の現場から―

公立昭和病院院長 かみ にし みち お  
上 西 紀 夫

平成22年秋の国勢調査の抽出速報によると、65歳以上の老年人口は23%であり、家族構成としては一人暮らしが31%、夫婦と子供は29%、夫婦のみは20%で、この中で高齢者世帯や独居の高齢者が増加している。

一方、死因の主要なものは①がん、②心疾患、③脳血管疾患、④肺炎であり、高齢者ほどその罹患率が増加し、救急対応が必要となることが日常茶飯事である。しかしながらこのような社会的背景により、医療の現場で様々な問題が起こっている。すなわち、がんに対する手術後や、急性心筋梗塞や脳卒中の治療後などでの退院先が、以前であれば家族の下に帰ることもある程度可能であったが、高齢者世帯では帰宅が困難な場合が多く、いわゆる老々介護にならざるを得ず、ましてや独居高齢者では行き先が中々見つからない。

つい最近のことではあるが、高齢者の患者さんで腹膜炎を呈し、緊急手術の必要性について実の子供に告げたところ、本人は手術を希望しているにも関わらず手術を拒否され、点滴や抗生剤の投与を余儀なくされた。患者さんは、長期入院となったが奇跡的にも命を取り留めることが出来たが、今後、このようなケースが増えてくることが予想される。

このことが示すことは、高齢者世帯や独居世帯の増加により社会から孤立しつつある中で、病気を得ることによりますます社会から切り離されてしまうことであり、10年後には団塊の世代が後期高齢者の仲間入りする時代ではどのようになるのか、医療そして家族が崩壊する前に至急考えなければならない。

略 歴： 1948年東京生まれ。専門は消化器外科とくに胃癌、食道癌の診断と治療、消化器内視鏡。前東京大学消化管外科学教授、東京大学名誉教授。2008年より現職並びに2009年より日本消化器内視鏡学会理事長。